

令和元年度 学校経営計画に対する最終評価報告書

石川県立大聖寺実業高等学校

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果%	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
1 授業規律及び生活規律に係る意図的・計画的な指導を徹底し、自己調整能力を高めることにより、生徒一人ひとりの学習規律の確立を図る。	① 本校の授業心得を周知し、授業規律の徹底を図る。 朝礼や授業開始時にロッカーの上や机の周りを点検し、乱れがあれば片付けさせる。	毎時、授業規律を遵守して授業に取り組んでいる生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満 教室や教場は整理整頓されており、学習に相応しい環境であると感じる生徒および教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	評価 A 後期 97.6% 前期 97.7%	守っている52.6%、だいたい守っている45%、あまり守っていない2.1%、守っていない0.3%であり、授業規律を遵守する生徒の割合は97.6%となり、A評価。前期評価(97.7%)とほぼ同じであった。 授業規律の徹底に向けた教員の意識は高く、今後も、授業心得について共通理解を図り、職員が一致団結した取り組みを継続する必要がある。挨拶については、未だ十分でない生徒も散見されるため、しっかりと挨拶とはどういうものか、私たち教員が常に範を示し、明るく気持ちの良い習慣を育てていく。
	② いじめや不登校の早期発見・早期対応に向け、気になる情報についてはすみやかに共有する。また必要に応じて会を持ち、組織的な対応を行う。	教職員の情報交換により、問題の未然防止や早期発見に努めている教員の割合が A 90%以上 B 85%以上 C 80%以上 D 80%未満	【生徒】 【教員】 評価 A A 後期 92.7% 90.9% 前期 92.7% 88.2%	整理整頓されていると感じている生徒は92.7%、教員は90.9%となり、ともにA評価であった。しかし教職員の9.1%は、あまりよくないとの厳しい評価がある以上、A評価に甘んじることなく、本当の整理整頓を全教員がきめ細かく行う必要がある。 授業開始時、確実に整理整頓されているか確認するなど、徹底することを図り、「整理整頓ヨシ！」の合い言葉を掛け合うことも検討する。
	③ 全校集会等を活用し、定期的な指導を通して規範意識の高揚と校則の遵守を身につけさせる。	昨年度と比べ、指導件数が A 20%以上減少 B 10%以上減少 C 10%未満減少 D 増加した	評価 D 今年度 112件 昨年度 98件 2月末比較	している45.5%、概ねしている48.5%、あまりしていない6.0%であり、情報交換を図っている教員の割合は94.0%となり、A評価。前期評価(94.1%)とほぼ同じであった。 年3回、いじめアンケートを実施するとともに、教育相談連絡会などを通じて連携を図り、未然防止と早期発見を重視する教員相互の情報交換に努めてきた。次年度は、SNS関連の問題がいじめ等に発展しないよう、事前指導を重点的に計画する。 産業人を輩出する専門高校として、今年度から基本的な生活習慣に関わる些細なことでも指導の対象にしたこと、またスマホ等の違反使用について巡視強化したことが増加の原因である。生徒自体は全体的におとなしく、悪質な事例はほとんどない。 今後も、教員と生徒との信頼関係を土台とし、学校生活におけるマナーや社会的モラルの育成について、生徒指導課を中心に全職員で取り組む。
関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・3学年ともに遅刻数の多さが目立つ。 ・教室の整理整頓について、教員の90%強に満足してはいけない。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・一部の生徒による遅刻の繰り返しが積算の数になっている。家庭との連携をより一層密にして指導を継続する。 ・専門高校における教育の一環として、全教員による整理整頓の意識をさらに高め、日常的に指導する体制を確立する。 			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果%	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
2 「主体的・対話的で深い学び」を追究・実践し、確かな知識とスキルを育み、学びつづける覚悟を持った、地域に期待される人材を育成する。	① 能動的学習の視点を取り入れた授業やICTを活用した授業に取り組み、新しい授業づくりに挑戦する。	ICTの活用やアクティブ・ラーニング等の手法を授業に取り入れている教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	評価 A 後期 87.9% 前期 88.3%	している15.2%、概ねしている72.7%、あまりしていない9.1%、していない3.0%、であり、授業改善に取り組んでいる教員の割合は87.9%となり、A評価。前期評価(88.3%)とほぼ同じであった。 昨年度は64%にとどまっていたが、新学習指導要領において重視される視点であることから、年度当初より教職員が積極的に授業改善に取り組んだ成果といえる。今後も生徒が主体的に学習に取り組める工夫を継続していく。
	② 質問に対して、根拠や理由を示して答えさせることで深い学びにつなげる。	学習内容について力がついたと感じている生徒および教員の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【生徒】 【教員】 評価 A A 後期94.4% 81.9% 前期86.8% 76.4%	学力・技術力が向上したと感じている生徒は94.4%、教員は81.9%となり、ともにA評価であった。しかし、「とても感じている」の割合では生徒が20.1%、教員が6.1%と決して多くない。 生徒の実態に応じて、学びの深さを意識させ、授業の展開を工夫することを今後も継続し、生徒の学力・技術力の向上につなげたい。
	③ インターンシップおよび長期企業実習(デュアルシステム)を通して、主体的なコミュニケーションで問題を解決する能力を高める。	インターンシップ・デュアルシステムは、主体的なコミュニケーション能力の向上に役だったと感じている生徒・保護者の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【生徒】 評価 A 95.5% 【保護者】 評価 A 87.0%	コミュニケーション能力が向上したと答えた生徒は95.5%、保護者は87%となり、ともにA評価であった。 企業実習に向けて、挨拶にとどまらず、積極的なコミュニケーションを意識することの大切さを継続して指導してきた。結果として、生徒のほとんどが、問題解決に役立ったと回答しており、今後も、受け入れていただく関係機関や地域産業界の力をお借りして、社会人として必要な資質・能力を育成していきたい。
	④ 生徒手帳や資格カレンダーを活用し、計画的、主体的に資格取得に取り組む力を育成する。	資格取得に向けて計画的に取り組んだ生徒・保護者の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	【生徒】 評価 A 87.5% 【保護者】 評価 B 78.0%	計画的に取り組んだ生徒は87.5%でA評価。意欲や姿勢が見えた保護者は78%でB評価であった。 昨年度の生徒評価(60%)の反省から、生徒手帳、資格取得計画カレンダーを十分に活用してきた。今後も資格取得の必要性を十分に説き、LHでの確認やガイダンス場面をより一層工夫し、計画的に取得を目指す意欲と合格率の向上を図る。
関係者評価委員会の評価	<ul style="list-style-type: none"> ・長、短期企業実習や課題研究などの発表会は、人前で行うからこそ良い取り組みとなる。できるかぎり発表する場面を増やしてほしい。 ・質問に対して受け答えするスキルは、社会人として本当に必要な力となる。 			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	<ul style="list-style-type: none"> ・発表はできるが受け答えが不十分にならないよう、生徒同士の質疑応答を充実させる働きかけや指導を強化する。またデュアルシステムのプレゼン発表会、ポスターセッション形式のインターンシップ報告会では、参観対象を工夫することで、発表の機会を増やし、質問に対して受け答えする場面を活性化させたい。 			

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果%	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
3 学校教育の全体を通じて、将来の産業人として求められる、人間力を磨き、人間性を涵養する。併せて、この取組を地域に発信する。	① スキルアップタイムやICTを活用した学習を通して、将来の産業人として必要な基礎学力の定着を図る。	スキルアップタイムを通して、基礎学力の定着や向上を感じる生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	評価 A 後期 88.9% 前期 77.4%	実感している23.3%、概ねしている65.6%、あまりない8.7%、ない2.4%であり、向上している生徒の割合は88.9%となり、A評価。前期評価(77.4%)を上回った。 昨年度の生徒評価(64%)の反省から、朝10分間のスキルアップタイム内容を吟味するとともに、教育支援システムの活用方法を見直した。今後も継続し、努力を要する生徒が、確実に学力向上するよう努めていきたい。
	② 生徒一人ひとりの生徒会活動への参加意識を高め、行事を通して人間的成長を図る。	生徒会行事(聖実祭、ホーム対抗行事)で自ら積極的に取り組んだ生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	評価 A 97.9%	生徒会行事への生徒の参画意識を高め、人間力の向上に努めてきた結果、意欲的に参加できた生徒の割合は97.9%となり、A評価。 生徒会行事は、自分たちで運営する行事であることから、今年度の体育祭では3年生が主体となり新しい取り組みを考案し、生徒の主体性が高く評価された。生徒会行事を通して、コミュニケーションスキルと人間的成長を見守り、自ら進んで役割を見つけることの大切さを、今後も継続し育てていく。
	③ ボランティア活動に積極的に参加することで、奉仕の精神や郷土愛を育む。	年間ボランティア活動に、2回以上参加した生徒の割合が A 80%以上 B 70%以上 C 60%以上 D 60%未満	評価 D 年間2回以上 34.3%	3回以上18.7%、2回15.6%、1回25.6%、0回40.1%であり、今年度は2回以上に注目したが、その割合は34.3%となり、D評価。 1回以上では60%と昨年度(82%)を下回ったが、1年生全員による海岸清掃ボランティアが雨天により中止したことが一因であろう。 ボランティア精神の醸成に向けて「大実ふれあい隊」を立ち上げており、今年度は「実高ものづくり隊」を結成し、高校生の授業と部活動で身につけた技術で地域のお手伝いに取り組み、HPや新聞報道を通して様々な活動内容を発信してきた。今後も地域の期待に応えつつ、生徒の自己有用感の醸成に努めたい。
	④ 学校ホームページを活用し、保護者や地域等への情報提供を充実させる。	学校ホームページによって、本校の教育活動について、よく理解できると回答した保護者の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 C 後期 76.0% 前期 54.7%	集計結果として、わかりやすい28%、概ねわかりやすい48%、少しわかりにくい13%、見ていない11%であり、わかりやすいと感じている保護者の割合は76%となりC評価。前期評価(54.7%)を大きく上回った。 今年度は学校ホームページの充実に取り組み、タイムリーな情報を提供し、見やすく、わかりやすいものになるよう努めた。しかし前期評価は低く、その対応策として、2学期から保護者向け配信メール文に本校HPへのリンクを貼ったことで閲覧数も増加した。今後も情報提供のあり方を工夫し、保護者から本校の教育活動について理解が得られるよう継続する。

関係者評価委員会の評価	・「大実ふれあい隊」「実高ものづくり隊」による地域貢献、課題研究の商品開発による加賀市PRなど、新聞報道等で活躍を目にしている。
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方針	・これからも地域に必要とされる学校、応援される学校をめざし、学校ホームページ等を有効に活用して本校の教育活動を発信していく。

重点目標	具体的取組	実現状況の達成度判断基準	集計結果%	分析(成果と課題)及び次年度の扱い(改善策等)
4 ワーク・ライフ・バランスに配慮し、効率的な働き方の実現や時間外勤務の縮減、指導の充実を目指す。	① 時間管理の意識を高め、日頃から生徒とのコミュニケーションをとる時間を確保することに努める。	業務の効率化を意識し、生徒と向き合う時間を確保するよう努めている教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 B 後期 87.8% 前期 85.3%	している24.2%、概ねしている63.6%、あまりできていない12.1%、であり、生徒と向き合う時間を確保している教員の割合は87.8%となり、B評価。前期評価(85.3%)より微増した。 全教員による業務の効率化と時間管理の意識が徐々に浸透してきており、生徒と向き合う時間を確保しようとする心がけが見える結果となった。今後も教育の質を高めつつ、業務の効率化に努めていきたい。
	② 探す無駄、待たされる無駄、やり過ぎる無駄を減らすことに努める。	次年度へ業務を引き継ぐことを前提に置き、メモ等を残しながら仕事をしている教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 B 後期 81.8% 前期 79.4%	している24.2%、概ねしている57.6%、あまりしていない18.2%、であり、業務を引き継ぐことを前提に置く教員の割合は81.8%となり、B評価。前期評価(79.4%)より微増した。 約18%の職員はできなかったと回答しており、一部の職員は、業務を引き継ぐことを念頭においた対応が十分にできていない現状にある。年度末までの2か月間で、できる範囲内で整理することに取り組む。本来の職務に専念するためには、必須のことであるという意識改革を図っていきたい。
	③ 部活動の休養日はスポーツ科学等の根拠に基づいて設定する。	効果的な休養日を設定して、毎月の部活動計画を立てている教員の割合が A 90%以上 B 80%以上 C 70%以上 D 70%未満	評価 A 後期 93.8% 前期 91.1%	している43.8%、概ねしている50%、あまりしていない6.2%、であり、計画的に活動している教員の割合は93.8%となり、A評価。前期評価(91.1%)より微増した。 高い割合とはいえ、あまりしていないと回答する教員の存在がある。主体は生徒であり、生徒の健康管理を第一に計画させる改善と校内で策定した活動方針を徹底し、効率的に競技力・技術力の向上を図っていく。
関係者評価委員会の評価	・企業では、業務マニュアルが定着している。学校でも取り入れ業務の効率化に努めればよい。			
学校関係者評価委員会の評価結果を踏まえた今後の改善方策	・次年度中に各課の業務マニュアルを作成し、業務の効率化と見える化に取り組む。			